

日清・日露戦争期日本陸軍における「軍夫」と「輜重輸卒」の実態

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤岡, 佑紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20924

2020年1月17日

「博士学位請求論文」審査報告書

文学部専任教授

審査委員（主査） 山田 朗 (印)

文学部専任教授

審査委員（副査） 落合 弘樹 (印)

専修大学文学部 専任教授

審査委員（副査） 大谷 正 (印)

1 論文提出者 藤岡 佑紀

2 論文題名

(邦文題) 日清・日露戦争期日本陸軍における「軍夫」と「輜重輸卒」の実態

(欧文訳) The Realities of “Military Laborers” and “Transport Soldiers” in the Japanese Imperial Army from the Sino-Japanese War to the Russo-Japanese War

3 論文の構成

序章

第1節 日本の兵站における「軍夫」と「輜重輸卒」

第2節 先行研究の整理

第3節 本論の視点

第1章 日清戦争直前の輜重整備

第1節 第一回試験

第2節 第二回試験

第3節 第三回試験

第4節 第四回試験

第5節 日清戦争前の日本国内の道路事情

第2章 日清戦争の軍夫に関する一考察—日清戦後の軍夫騒擾から—

第1節 軍夫給与をめぐる騒動と新聞報道

第2節 請負人側の反論

第3節 軍夫騒擾の争点

第4節 各師団の事情と陸軍の対応

第3章 北清事変における軍夫と列国軍

第1節 日本軍による軍夫雇用

第2節 日英組によるイギリス軍への日本人軍夫供給

第3節 列国軍による日本人「移民」雇用

第4節 北清事変の軍夫をめぐる新聞報道

第5節 列国軍による人夫・苦力の使用

第4章 日露戦争の軍役夫

- 第1節 日露戦争における軍役夫規定と軍役夫の運用
- 第2節 日露戦争の軍夫熱
- 第5章 「補助輸卒」の成立
 - 第1節 日清戦争での軍夫をめぐる軍紀問題
 - 第2節 日清戦争初期における人馬現地調達の実態
 - 第3節 1898年の輜重輸卒第一補充兵の大増員
 - 第4節 北清事変における補助輸卒隊動員計画
- 第6章 「蝶々蜻蛉」と日露戦争
 - 第1節 北清事変における列国軍の輜重
 - 第2節 北清事変の補助輸卒隊評価と補助輸卒編成の改正
 - 第3節 日露戦争における「蝶々蜻蛉」の実態
- 終章
- 参考文献一覧

4 論文の概要

本論文は、日清戦争から日露戦争にかけての日本陸軍の陸上輸送・補給を担った「軍夫」や「輜重輸卒」の実態を明らかにし、アジア太平洋戦争における日本軍の「兵站軽視」が、当初からのものであったのか否かを検証しようとしたものである。従来の研究では、アジア太平洋戦争期の日本軍のイメージから類推する傾向（もともと兵站を軽視していたとする）が強かったが、近年、次第に日清戦争期を中心に実態解明が進み、そうした潮流の再検討がなされつつある。本論文は、これまで研究蓄積が少なかった北清事変（義和団事件）から日露戦争にかけての「軍夫」や「輜重輸卒」についても検討の対象としているところが大きな特徴である。本論文の要旨は以下の通りである。

第1章「日清戦争直前の輜重整備」では、1891年から1893年にかけて4回にわたって実施された輜重車両（馬で牽引する輸送用車両）の長距離行軍試験について分析されている。この試験は、一馬曳二輪車の開発・制式化のために行なわれたものであったが、国内の民間馬の徴発や輸送にあたっての道路の補修方法、難所（急坂や隘路）の突破法の研究も兼ねたものであった。この試験行軍の結果、陸軍は、日本国内の道路事情がきわめて悪く、車両開発以前に交通インフラの整備が喫緊の課題であることを認識した。一馬曳二輪車による長距離輸送は、困難をきわめたが、将来の朝鮮半島・大陸での機動戦にそなえて、陸軍は車両を制式化した（ただし、日清戦争では現地の道路事情の関係でほとんど活用されなかった）。

第2章「日清戦争の軍夫に関する一考察―日清戦後の軍夫騒擾から―」では、日清戦争では陸軍の輸送業務は、主に輜重兵の監督のもとに傭役人夫である軍夫（民間人）がおこなったが、戦後、軍夫徴集を請け負った請負人と軍夫との間で暴力事件や訴訟が頻発したことが取り上げられている。東京で起こった「軍夫騒擾」は、大阪・名古屋などにも波及し、帝国議会でも問題になり、新聞でも大きく取り上げられた。この騒擾の原因は、ほとんどが金銭トラブル（請負人の賃金搾取）で、当時の軍夫には「愛国的熱情」で応募した者が存在したものの、多くが「出稼ぎ労働者」であったことを浮き彫りにする結果となった。また、師団ごとに給与や雇用規則がまちま

ちで、陸軍として統一したものがなかったことも騒擾の一因であり、陸軍は改善を迫られた。

第3章「北清事変における軍夫と列国軍」では、欧米諸国軍と日本軍の軍夫雇用について検証されている。事変初期において欧米諸国軍は、多くの日本人軍夫を雇用したが、日本政府は、外国軍隊と日本人軍夫のトラブルを警戒し、外国軍雇用の軍夫を移民保護法にもとづく「移民」として規定し、賃金を統一するなど、軍夫を斡旋する移民会社（請負会社）を外務省が管理した。しかし、実際には外国軍に雇用された軍夫は、各地でトラブルを起こしたため、大半が契約を打ち切られることとなった。また、この事変において日本軍は、風紀を乱す（軍の体面をけがす）恐れがある日本人軍夫の雇用を最少限度にとどめ、中国人を軍夫として採用していた。

第4章「日露戦争の軍役夫」では、日露戦争に際して陸軍が定めた「戦時軍役夫備役規則」を分析するとともに、民間から軍に提出された「軍夫請負願」が検討されている。請負願を出した者の動機は、「愛国心」から出たもの、戦後の日本人進出の機運を作ろうとするもの、貧民救済のためのもの等に分類されるが、基本的には請負業者の利益追求に他ならなかった。

第5章「『補助輸卒』の成立」では、軍夫による犯罪や風紀の破壊、費用の膨張などに頭を痛めた陸軍は、補助輸卒隊を設置することで軍夫主体の輸送体制の再編を図ったことが示されている。1898年から輜重輸卒第一補充兵が30,000人増員され、これらの兵士で編成された補助輸卒隊は、通常の輜重輸卒の任務とは異なり、馬を用いず徒歩車両（輸卒が牽引）を用いた運搬任務や雑用に従事するもので、教育召集による本格的な軍事訓練は施されず、簡閲点呼のみが実施され、帯剣も支給されなかった。補助輸卒隊は、北清事変に際して初めて動員された。

第6章「『蝶々蜻蛉』と日露戦争」では、日露戦争に際して補助輸卒隊が正式に戦時編制に組み込まれ、戦時輸送体制の一つの柱となったものの（軍夫も併存）、武装もなく、軍夫と同様の任務についていた彼らは、他の兵種や一般人から「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々蜻蛉も鳥のうち……」などと囃し立てられたことなどが検討されている。

終章では、これまでの分析を総括して、軍夫や補助輸卒が日本陸軍の兵站軽視の産物であったといえるのかどうかを考察し、当時の欧米の軍隊のように植民地から多数の軍夫を動員できる態勢にない日本軍にあっては、次第に軍夫から輜重輸卒・補助輸卒に兵站輸送の主力を移行させて行ったことや、動員できる馬の決定的な不足から徒歩車両の導入などの措置をとらざるを得なかったことが述べられている。

5 論文の特質

本論文の特質は、以下の3点にまとめることができる。

- (1) 従来、研究がほとんどなされていなかった日清戦争から、とりわけ北清事変・日露戦争期の軍夫・輜重輸卒・補助輸卒の実態を検証し、軍夫が基本的に出稼ぎ労働者であったこと、請負人との間に不断に金銭トラブルが生じていたこと、軍夫の問題点を改善するために補助輸卒隊が導入された経緯を明らかにしたこと。
- (2) 北清事変における欧米諸国軍と日本軍の軍夫の使用法、輸送車両の性能等を比較検討し、軍夫使用そのものは欧米軍隊でも一般的であったこと、欧米各国は軍夫の調達について植民地を基礎にしたグローバルなシステムを有していたこと、さらに輸送車両の性能はやはり欧米軍隊に一日の長が見られたが、中国の道路事情がそれらの有効使用を妨げたことを明らか

にしたこと。

- (3) 北清事変以降、陸軍は従来の軍夫に頼る輸送体制を改善し、輜重輸卒（馬曳車両・駄馬使用）・補助輸卒（徒歩車両使用）を中心とした軍人主体の輸送のあり方を確立したこと、しかし、武装もない輸卒たちは、他の兵士たちや一般人からも軽視される結果となったことを明らかにした。

6 論文の評価

アジア太平洋戦争期の日本軍の輜重・兵站軽視は確かなことだが、日本軍はもともとそういった分野を重視していなかったのかどうか、という本論文の課題設定の仕方自体は、きわめて斬新なものである。また、限られた予算、日本・朝鮮・中国における道路事情の劣悪さ、国内で去勢技術が普及していなかったことにより動員できる馬の頭数がきわめて少なかったことなどの要因により、十分な輸送体制が整備されにくい条件が存在していたことを明らかにしたことは本論文の特質であり、軍事史研究の発展に大きく貢献するものである。

このように本論文の意義は大きく、当該分野の研究を進展させたことは確かだが、次のような問題点が残されている。

- (1) 日清戦争前の試験行軍や日清戦後の軍夫騒擾などの分析は貴重だが、日清戦争における軍夫の実態研究という面では、先行研究に依拠する部分が多く、独自性を出し切れていないこと。
- (2) 日清戦争・北清事変・日露戦争を経験するなかで、軍夫から輜重輸卒へと兵站輸送の軸足が移行したことは実証されているが、陸軍の兵器・弾薬・食糧などの輸送の規模（より重量あるものを多数輸送するようになる）の分析が十分でないこと。
- (3) 輜重輸卒が蔑まれたことをもって「兵站軽視」とすることが適当であるか否か、さらなる考察が必要であること。

以上のように、本論文にはいくつかの遺漏・不備、未解決の問題点も見受けられるが、それは部分的な欠点にとどまるものであり、研究の主旨と意義を損なうものとは考えられない。

7 論文の判定

本学位請求論文は、文学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（史学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上